

## 災害時、効果を発揮できる訓練を！

各地域（各自治会）には自主防災組織があり、あなたもその一員です。災害時には自主防災組織が大きな役割を果たします。災害時に、より効果を発揮できるよう訓練の内容をもう一度確認してみましょう。

### 要配慮者（高齢者・障がい者など）の避難支援

- ・災害時に避難支援を要する人がどこに居住しているかを確認
- ・訓練時に避難支援を行いながら、避難する場所とルートを確認
- ・要配慮者の避難訓練への参加が大切。どのような形での避難支援が有効であるかを学ぶ

### 負傷者の救出・救助訓練

- ・木材やバールをテコにしたり、ジャッキを使用した訓練
- ・負傷者を家から一時避難地や救護所まで搬送する訓練※実際に担架搬送を行うと人の重さや距離などで新たな気づきがあります。



### 避難所開設訓練

災害時には地域での自主防災活動とともに避難所開設も実施していくことになります。避難所は複数の自主防災組織が集まり運営します。

- ・年に数回は顔合わせを実施
- ・避難所の開設方法やレイアウトを確認
- ・運営する班員や役割分担を確認

### 自主防災倉庫に入っている機材を確認・使用

- ・女性や高齢者など誰もが使用できるように操作手順を確認する訓練
- ・資機材が使用できる状態であるか定期点検
- ・自主防災倉庫の鍵の保管者を確認



### 「黄色いハンカチ作戦」を活用した安否確認訓練

市では、地震発生後「わが家は大丈夫。他の人を助けてほしい」というメッセージとして、道路から見える場所（例：玄関・ベランダ）に黄色い布などを掲げる運動を推進しています。

自主防災組織での安否確認が容易になり、救助活動の効率化が図られます。

※平成26年3月現在、40の自主防災組織で黄色いハンカチ作戦による安否確認訓練を実施しています。



### わたしたちの自主防災組織

旭ヶ丘町内会長 長倉 武男さん

東日本大震災後、防災のあり方を考えました。

「自分の命は自分で守る」上で町内会員の防災意識調査アンケートの実施を進めてきました。また、平成23・24年度は耐震診断の申し込みを、24年度は家具の固定希望者を取りまとめ市へ対応を依頼しました。旭ヶ丘は高齢者が多いため、集会所も避難所として活用すべく増築をすすめ25年度に落成し、非常用発電機も設置しました。



防災訓練も見直し、旭ヶ丘公園や集会所で行う事で実践的な訓練内容とし、集会所での避難所体験、炊き出し訓練、消火訓練などを実施するとともに、要援護者サポート班を結成し黄色いハンカチによる安否確認を実施しました。毎年70～80%の世帯が参加し、災害に対する認識が深められてきています。

## 住民学習が原動力 石油コンビナート 反対運動

したことです。建設予定地の中郷地区はもちろん市街地の商店街なども協力しています。また、多くの女性が集会や学習会に加わり、デモ行進の先頭に立ちました。写真①は、安久町内会の幟旗です。



▲写真①幟旗 (安久町内会)

大気汚染、公衆衛生、地下水くみ上げなど多岐にわたり、調査結果は地域にとって重要な判断材料となりました。

この松村調査団が公害の恐れありとした中間報告を発表したのが五月十八日、さらに五月二十三日夜には市公会堂(現市民文化会館)において「石油コンビナート反対市民大会」が開かれ、一、五〇〇名が参加、ここで三島市長による計画反対の意思が表明されました。



▲写真②三島民報 (昭和39年5月25号)

今から五十年前の昭和三十九年(一九六四)、三島は石油化学コンビナート反対運動の渦中にありました。五月には松村調査団による公害調査の中間発表や市民大会があり、建設計画の趨勢が中止へ向かって多く傾きました。そこで今回はこのコンビナート反対運動を紹介します。

昭和三十八年十二月に三島市、沿津市、清水町にまたがる石油化学コンビナート建設計画が県より発表されました。三島では中郷地区に石油精製工場が建設される計画でした。

計画発表後、住民の間で大きな反対運動がおこり、その結果、建設計画は撤回されます。日本の環境運動の中では地元の反対運動がその目標を達成したためずらしい事例です。

この運動の特徴の一つは婦人や町内会をはじめ市民各層が参加

もう一つの大きな特徴は、小さな学習会や現地視察を重ねていき、その結果をもとにして公害の恐れを地域住民同士が共有し、反対運動を展開していったという点です。学習会の講師には遺伝学研究所や高校などの研究者や教師、地元の医師などが当たり、多角的な視点からの学習が進められました。

住民の学習が大きな位置を占めた反対運動の中で、地元では遺伝学研究所の松村博士を代表とする調査団が組織されました。調査は

その後も反対運動は秋まで続き、最終的に建設計画は撤回されました。このできごとは三島の水や空気が守られたという点で重要であるだけでなく、多数の住民が自ら学習してまちづくりの方向性を決定した事例としても大きな意味を持つていてのではないのでしょうか。



ふるさとの人物ゆかりの地②

### 並河五一 (誠所)

享保9年(1724)並河五一は、三嶋大社神主矢田部休翁の誘いにより江戸から三島宿を訪れ、漢学塾「仰止館」を開きます。

誠所の学問の幅は広く儒学、歴史、兵法、和歌などに及びました。門人は土地の指導者の子弟が多く、『豆州志稿』編纂の秋山富南を輩出しました。墓碑には四十三人の門人の名が刻まれ、恩情を受けた師を慕う碑文が刻まれています。また、門人ら協力のもと六年の歳月をかけ五畿内(河内・摂津・大和・和泉・山城)を歴遊し『五畿内志』を編纂します。

誠所希望のもと富士のよく見える三島宿近郊の金堀塚(現三島北高内)に葬られましたが大正八年野戦重砲兵旅団誘致により、本覚寺に移転しました。



▲並河五一の墓 (泉町・本覚寺境内)